

澄江堂——河童図

小川 和佑

東京の下町では河童伝説が大正の末ごろまでは真実をもって語られていた。現に河童橋という橋さえあるくらいだ。彼が河童図を描きはじめたのは大正九年の夏以来である。

その二年後、彼は田端のわが書齋に澄江堂の扁額を挙げた。それによってわれわれも彼を澄江堂と呼ぼう。このころ、彼は長崎に遊んだ。求められてしきりに河童図を描いた。長崎の旗亭たつみで照菊の請めに応じて描いた「水虎晚帰之図」の屏風絵は最大の傑作といわれている。「照菊、結城縮みに八反の帯を締む。東京の芸者と異なる事多し」とは『長崎日録』の一節に見える。

長崎駅のホームでは上り東京行き急行の発車五分前だった。押し上げた二等車の窓の奥で澄江堂はかすかに微笑を浮べて座っている。

ホームは五月の明るい光なので、その微笑は深い陰翳を刻んでいた。見送りの人びとの中に照菊も混っていた。この日、彼は珍しくダークのスーツを着ていたが、その内ポケットから黒皮の手帳を取り出すと、それに何か書つけて、無造作に引きちぎって、窓から照菊に向かって、ひらひらと振った。彼女は半ば放心していた。発車のベルが響いた。高らかなベルが彼女の放心を覚ました。列車がゆっくり動いた。彼女はひらひらする紙切れを蝶のようによろよろと追いかけた。そして、ようやく紙切れは彼女の手に握られた。燃えた石炭の匂いが澄江堂の残像のようにいつまでもホームに残っていた。

菅艸の咲いたばってん別れかな

紙切れにはモンブランのペンで走り書きさされていた。——晩年、照菊は夢のような一場の別れを飽かずに繰り返し繰り返し人に語った。わが澄江堂は悪魔的な微笑を浮かべて東京へ向った。

菅艸＝かんぞう（原文ふりがな）

※急行＝初出では「特急富士」を初刊時に訂正

出座：昭和62年（1987）9月20日（日）第25回座会（神田神保町・五十嵐ビル）

初出：昭和62年（1987）10月号「短説」（通巻27号）

初刊：昭和63年（1988）7月1日『青いうたげ』昭和六三年度 年鑑短説集（第二巻）

再録：令和6年（2024）3月9日ブログ版「小川和佑先生著書目録」（海とユリ社刊）

（<http://ogwkzsk.blog.fc2.com/blog-entry-102.html>）

再録：令和6年（2024）9月20日「小川のせせらぎ／小川和佑ゼミナールOB会誌」第3号

Copyright (C) 1987 Ogawa Kazusuke All rights reserved.